

名の尸と為ることなかれ。謀の府と為ることなかれ。事の任と為ることなかれ。知の主と為ることなかれ。尽を体して窮まりなく、而して朕なきに遊び、その天より受くる所を尽くして、得るを見ることなかれ。亦だ虚なるのみ。至人の心を用うることは鏡の若し。将らず迎えず、応じて蔵せず。故に能く物に勝えて傷わず。

【大体の意味内容】

立派な名前だけ持っているが、実は屍に過ぎないといったものになってはいけない。有害な陰謀を張り巡らせる政策集団になってはいけない。大事業の担任に名を連ねて、その功績を我が物にしようなどとはするな。むやみに知識ばかりコレクションして、博学多識の教養人の振りなどするな。取るに足らない小さなことのように見えても、その道の奥義を窮めれば、今自分が取り組んでいる仕事の形を超えた、別次元の世界に遊ぶことができる。(例えば、ただ走っているだけのランナーがその苦しみを突き抜ければ、身体がひとりだけで動いて天空を駆けめぐるような感覚になるがごとし。) そのように天に与えられた超越的な境地を味わい尽くせばよいのであって、やれ金メダルだの新記録だのといった俗な名誉を得ようなどとはするな。ひたすら虚心となつて、想像もしなかった素晴らしい世界を感じせよ。無双の境地に到達した至人は、己が心を鏡の様に働かせるものだ。去るものごとさら送りだそうとはせず、来るものを特別歓迎しようともしない。ただ自然な成り行きに任せるのみで、別れるのがつらいとか、会えるのが待ち遠しい、といった我執を身の内に蓄えたりしないのである。それゆえ、様々な事物と交渉する過程で、我が身を

傷うということがない。

「俺が俺が」「私は私は」「と、自分の事はからいじだわる気持ちを持たず。自分の欲求を満たさうとするればキリがないし、名譽欲を追求して些細なことを自慢したり、他人を貶めたりするのはいかにも見苦しい。嫌なことがあれば自分を可哀なうがり被害者ぶり、他人に責任転嫁するのは本当に無様だ。努力する最終目標が何らかの名譽や栄冠を勝ち取るため、というのでは、真の歡びは得られない。出会いもあれば別れもある。誰かに執着しすぎてスーターカーとなり命まで奪う愚かしさと、別離の悲しみや逢瀬の期待に身悶えする我執の深さと、どれほどの違いがあるか、どちらも業の深さが罪深さとも重なってくるように、大差ないのではないかな…

そんなメッセージが聞こえてくるような章段です。どれも人間的心性の表れともいえますし、乗り越えるべき課題とも思えます。

昔なら反発心も起きたと思います(ので、生徒の皆さんもそうかもしれませんが)、今は案外普通に読めるのは年のせいかもしれません。

ただ、生死をかけるような究極の場面では、このような「何事にもとらわれない」境地に近くくことが大事として、古今東西多くの達人たちが異口同音に唱えてきたという事実も、記憶の片隅にはおいておきましよう。

よへく引き合いに但しませんが、無敗の劍豪宮本武蔵も白楽天の次の詩句を座右の銘にしていました。

寒流月を帯びて澄める鏡の如し

夕吹霜に和して利きこと刀に似たる

「寒気に満ちた水の流れる月が映り、澄んでいるのは鏡のようだ

冴えた夕風が霜の冷気を帯びて、身を刺す鋭さは技身の刀のようだ

交通事故にあう瞬間、ハンドルをぎゅっと握りしめるのではなく、すっと力を抜くことができるかどうかが生死を分ける、という話も聞いたことがあります。カーンとなってしまえばずの時こそ、氷のイメージで脳や意識を瞬時に冷却されるじや。

わかっているても実践は困難でしようが、「それが極意」だとは知っておきましよう。